

IWATE 教育総研ニュース

No.14 2022.11.7

岩手県教職員組合
岩手教育総合研究所

〒020-0022

岩手県盛岡市大通一丁目1-16

岩手教育会館4F 岩手県教互センター内

TEL/019-623-4432 FAX/019-652-9535

E-mail:j.sato8252@gmail.com

リレー特集

岩手の学校に期待する

～コロナ禍を超えて未来へ～



「子どもと死者との悪戦苦闘」



ひのおか ふみのり
日野岳 史乗
(専立寺住職)

略歴

1985年生。

盛岡生まれ盛岡育ち。

大学進学で盛岡を離れるが2010年に帰盛、結婚。

実家の専立寺の小坊主に。

2019年専立寺住職に就任。

男の子3児の父。

私には子どもが3人いる。小学校3年生の8歳と幼稚園年少の4歳、末っ子が1歳半。3人とも男である。お寺という環境のため、いわゆる「職場」が自宅であり、自宅が「職場」である。基本的に出勤が無いために、幼稚園や学校がなければ24時間一緒のことも多い。

悪戦苦闘である。「仏の心」なんてものはカケラもない。イライラもするし疲れる。3人の子どもの日々振り回されている。悪戦苦闘しかできないので悪戦苦闘するほかない。悪戦苦闘の日々の親の背中を見せていく以外の子育てが出来ない。

2018年、今から4年ほど前に父親が死んだ。急であった。夜に倒れて救急車で運ばれ、次の日の昼に息を引き取った。倒れた翌日の午前中、血圧も下がりいよいよ亡くなるという連絡が病院からあり、家族で病院に向かった。長男はこの時4歳、幼稚園の年中で幼稚園に行っていたのだが、妻に迎えに行ってもらい病院に来させた。亡くな

る瞬間、臨終、いわゆる「死に目」に合わせたかったのだ。意味はわからなくとも。結果、無事に死に目に立ち会う事が出来た。4歳が何をどう見て何を感じたのかはわからない。

当日まで元気だった親父が突然亡くなったので私も含め家族は大慌てだった。そしてよく泣いた。涙まみれでその後の儀式やらなんやらにいつもの悪戦苦闘する親の背中を見せるしか子どもには出来なかった。

死に目やその後の儀式に子どもを参加させることが、近年少なくなっている気がする。遠い親戚ならば仕方ないこともあるかもしれないが、祖父母や伯父伯母のお通夜や火葬、葬儀あたりならば、「学校があるならばわざわざ休ませてまでは…」「大人だけで…」と考える大人も多いようである。(現在はコロナ的な事情もあるのだろう) 家族的な事情や環境もあるので一様に杓子定規では言えないのであるが、個人的には儀

式を含め「死」が遠巻きにされているように感じることもある。

他者の死を感じる。そのことがどう影響するのかは分からない。が、死とは意外にも身近である。植物であれ、動物であれ、人間が口にするものは生物の死を経ているし、人間も理由はどうあれ毎日死んでいる。当たり前のことである。この当たり前が難しい。生き物は必ず死ぬ。生きていくという状態である以上死は絶対にある。至極当然であるが、**死は非日常的**でもあるのだ。当たりの非日常、とでもいうのか非常に不思議なものでもある。

自らの死という、あとは知ったことないわ、という態度も可能であるのだが、人間は一人で生きていないので必然他者の死にも関わらざるを得ない。無論自らの死後も他者に関わってもらわなければ棺桶にも入れないし火葬もしてもらえない。自らの死後自らがどうなるかは分からない。死そのものの体験は他者には語り得ない。が、我々は他者の死、そして他者の死後は体験できる。今、現在とて、誰か**他者の死後の世界を我々は生きて**いる。その意味で死者とは常に隣り合わせとも言える。そして死もそうである。

ちなみに、断っておくがこれは仏教的思想や理論ではない。全く関係ないとも言えないが、現状私の小さな脳みそでは、仏教や仏教理論との整合性を語る思想や理屈を整理しきれていない。私自身が葬儀や儀式、お寺の中での生活の現場感から感じた思いが大きい。

他者の死後を私たちが生きているということは、実感としてはほぼ感じられない。感じることに難しい。しかし、生きている者、生者だけの理屈や世界観というのはどうも息苦しさを覚える。

例えば資本。お金。これは生者同士でしか通じないものであるがなかなか厄介なものでもある。お金に限らず他者への配慮や気疲れも多い。地位や名誉。立場。致し方ないことでもあろうが、どうも、これでいいのか？との疑問は残る。多忙な生活のルーティンに疑問はいつの間にか胡散霧消する。誰かの死者のことなど微塵も感じる事が出来ないし、立ち止まる暇すらない。悪戦苦闘である。

他者の死が経験できる、それを感じる事ができることが、生者同士の関係にも(良くも悪くも)影響する。そのことから逃げたくはないと思う。子どもたちにも死に様や遺体のぬくもり(あえてこう表現したい)にも触れてほしい。死とは当たり前前でもあるからだ。

何も特別感謝しろというわけでもない。死してなお鞭を打ちたいような憎い死者もあるかもしれない。どんな形であれ死者とどう向き合うのか、一見すると無理難題な悪戦苦闘から子どもや若者を遠ざけるべきではないように思う。そのことを忘れると、どうも「誰にも優しくない世界」しか待っていない気もするのである。



Uターンについて考える ～心の過疎～



きむら あきら
木村 聡
(一般社団法人陸前高田青年会議所会員)

略
歴

1993年東京都板橋区出身
2013年陸前高田でNPO活動に参画
2019年慶應義塾大学院SDM研究科修了・陸前高田に移住

私は東京都の生まれ育ちです。震災の時は高校2年生。親戚も関東圏のため東北には行ったことがなかったのですが、何かしなければと思ったことを覚えています。初めて陸前高田を訪れたのは2013年でした。支援したいという思いで行ったのですが、町の方からさまざまなことを教えていただき、社会を良くしたいという思いで東京から通う同世代の仲間にも出会いました。

支援というより、まちおこし。大学生の時はほぼ毎月陸前高田に通っていました。可愛がってくださる街の方がいて、志を共にする仲間たちがいて、活動に充実感を感じ都内での就職ではなく陸前高田に移住することを選択しました。

私自身が移住者、まちづくりをする同世代と触れ合う中で、地元出身者（Uターン者）の活躍が鍵になるのでは。という思いから、教育・まちづくりの観点から考えたこと、青年会議所で実践したことについて書きたいと思います。

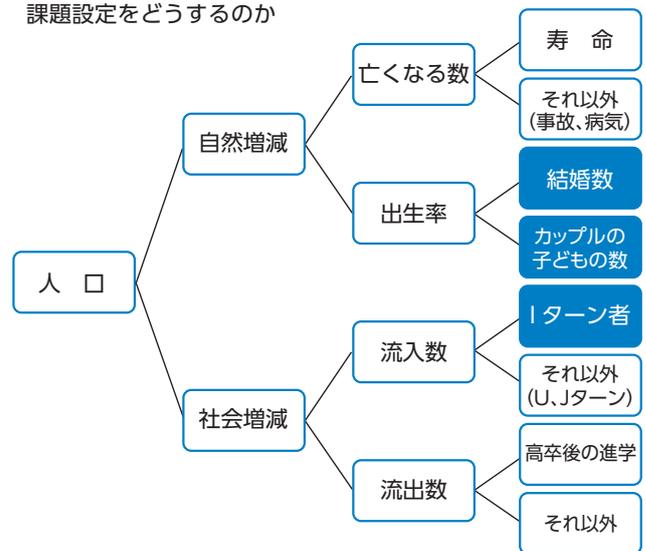
なぜ、Uターンに着目したのか行き着いたのか

人口減少が問題だ。と良く言われますが、その原因を因数分解することがまず重要です。

市あるいは国で課題設定としているのは、結婚、カップルの子どもの数、Iターンです。（たとえば寿命で亡くなる方の数が多いことが人口減の一番の要因ではありますが、これは解決し得ない問題なので、課題設定としてはふさわしくありません）

地方は「よそ者、若者、バカ者」が変えるとか言われて、私も含め移住者仲間も多くがメディアに取り上げていただいたりします。

課題設定をどうするのか



一方で地域を回っていると「子や孫はもう帰ってこないから、お前達（移住者の私たち）には期待したいよ・・・」という嬉しいやら、切ない声をよく聞きます。

市のUターン施策はどうなっているのでしょうか。気になったので調べてみると、実態について「わからない」という回答でした。市への流入数は把握できていますが、内訳がわからない。（現在は県全体での調査が行われています）

現状がわからないのに、施策を打てるわけはありません。

- ・移住定住窓口の方曰く「昨年、100件ぐらい移住相談があったが、全員Iターン者だった」
- ・市の担当課曰く「Uターン奨励金という移住者に対して3～4万円支給する事業があるが、その受給者がUターン者なのかは把握できていない」

という話でした。

議会での議論を調べると(2022年3月時点)

- ・「Iターン」は128件ヒット。
- ・Uターンは脅威の0件・・・。

もちろん年間で何人もUターンの方はいるのですが、少なくとも「政策として、目標を定め、現状を分析し、ギャップがあるなら仮説を立て次の政策を打つ」というPDCAは回っていません。

市の人口動態から概算するとどうやら各年代の人口の6~7割以上は流出し戻ってこないと言えそうです。30代の方に聞くと「今の段階で地元にいる同級生は1割ぐらいじゃないか」という声も聞こえてきます。ここに対して、施策を用いないというのはもったいない(伸び代がある)ように感じます。

人口流出して戻ってこない原因の仮説

- ・地方で進む、高学歴化。(今の高校生の進学希望割合は、親の代の約2倍。そのうちほとんどが奨学金を利用します。)
- ・就きたい仕事がない
- ・(一方で地域では圧倒的な人手不足にもかかわらず)その情報が届いてない

かつ、もう一つ重要な議論が、なぜ、Uターンについてここまで扱われてこなかったのか。です。

扱われてこなかった原因の仮説

- ・Uターンする人は「都落」のイメージがある(地元の方のヒアリング、「書籍：関係人口の社会学」より)
- ・Uターンは、教育から始まり、移住施策、産業施策と絡む、長期複合的施策のため取り扱いが難しい。(≧Iターン施策はマーケティング的にPDCAを回せば5年ぐらいで成果を出しやすいのかもしれませんが。)

心の過疎について

私は大前提、「人口減少社会」を受け入れるべきと考えています。どう足掻いても人口は減っていく。その上でどう豊かな社会システムをつくるか。という話が重要です。人口流出、人口

減に伴い、地域内で自信や主体性が失われていくことを「心の過疎」と言いますが、Uターン施策はその意味で、「どうせ子どもたちは戻ってこない」「こんな街2度と戻ってくる気はない」というのはまさに心の過疎を生み出していると思います。でも「いつか陸前高田に戻ってくるもよし、都会で活躍するもよし」という状況で子どもたちを送り出したい。

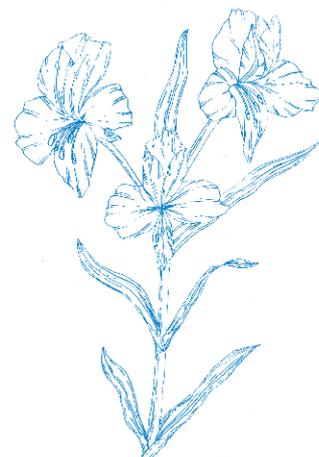
そのような思いから所属する青年会議所で2022年4月に、「陸前高田は30代からが面白い。~街の変化と希望に会う旅~」という企画を行いました。これは20~30代の市出身&市街在住者(=Uターン潜在者)が対象です。

震災後に市を出た方も多く、子育て環境、Uターンの先輩の話、地元事業者との対話などを行いました。市街在住者の地元へのイメージ。市内JCメンバーのUターンへのイメージそれぞれに変化が見られました。

実はこの企画に参加してくれた20代の女性が、陸前高田に戻ってくる決意をしたと連絡をくれました。

「地元は好きだけど、東京で失敗しない限り戻っては来ないかな」と言っていましたが、さまざまな要因が重なり、この街でがんばりたいと思ってくれたようです。(9月末時点)

地域の課題を題材にした探究学習やキャリア教育が盛んに行われています。もちろん一人一人の人生は自由です。一方で、地域としては「ぜひ戻ってきてください!一緒にいい街をつくりましょう」というメッセージが何より必要ではないでしょうか。過疎化は自然現象ですが、「心の過疎」は我々の意志で阻めるはずです。





教室の窓から



頭髪規制の解除を 生徒たちが実現するために (後編:前号からつづく)

11月下旬の生徒総会に生徒会・頭髪検討委員会から、頭髪規制(男子の丸刈り)の解除に関して、全校生徒へのアンケート集約をふまえて次のような提案があり、全校でのべ92人の発言ののち、全員一致で決議された。

《頭髪規制の見直しについて》

(1) 髪に対しての規制

- ①常識を外れた髪型をしない。
- ②自己管理をしっかりする。

(2) 日常生活の中での取り組み

- ①自ら社会的な面の生活向上に努める。
- ②生徒会をさらに発展させていけるように努力する。
- ③何か問題が起きても学級・全校で真剣に話し合い解決する。
- ④全校決議をいつも頭において生活する。

そして、生徒会としての決意を地域や保護者の人たちに理解してもらうために、11月28日～12月11日の2週間、署名活動(対象は学区内の小学4年生から大人)を実施して、目標の署名数が達成できた場合に、校長宛に要望書を提出することになった。

提案内容を検討する段階で、署名数のめどについて、職員側は当初1,000人ではどうかと検討委員会にはかった。しかし、生徒会側から「大事な問題なので、ぜひ1,500人で提案させてほしい」との申し出もあり、1,500人を目標に署名に取り組むことになった。当時のK町の人口は約1万人だったが、学区内には数千人ただろうか。300人の全校生徒が1人5人以上を目標に署名を集めようということになった。こうして、生徒全員による2週間の署名活動の結果、1,531人の署名を集めることができ、この署名を添えて、12月25日に校長に要望書を提出することになったのだった。

しかし、署名活動終盤になって目標数集約の見通しができてきた時に、校長から次のようなことを

言われた。

「署名が集まってきているようだが、生徒たちは、家族や小学生など簡単に頼める人たちにお願いで集めているのではないだろうか?」

「いえ、決してそうではありません。みんな一生懸命に集めています!」と言いたところだったが、私も状況の把握はできていなかった。そこで、生徒たちに緊急に署名集めの状況についてのアンケートを行い、職員会議で報告することにした。

そこからわかったことは・・・

- ・ お願いした人に対する署名をしてもらった人の割合は85.4%
- ・ 署名をしてもらった人のうち大人の割合は76.1%(小学生・高校生は23.9%)
- ・ 署名を「簡単にもらえた」「どちらかといえば簡単にもらえた」と答えた生徒は60.3%
- ・ 署名を「もらうのが大変だった」「どちらかといえば難しかった」と答えた生徒は39.7% また、活動のようすについては次のような状況の記載があった。(一部)
- ・ 親から署名をもらうのが難しかった。いろいろと説明してなんとか説得した。
- ・ 最初はみんな反対だったが説得して署名をもらった。思ったよりも署名をもらうのは大変だった。
- ・ 賛成してくれない人を納得させることができなかった。納得してもらえるようにしたい。
- ・ 小学生に「自分たちが中学校に入るときに丸刈りでなくなるの?ラッキー!」と言われたので、「簡単に自由化になるわけではないからプリントをよく読んで理解してから署名してね」と話した。
- ・ 高校生に「自分たちが卒業してから自由化するのはずるい。(でも中学生の時に活動しなかった自分たちも悪いけど)」と言われた。「ずるい」と言われて反対されるとは思わなかった。
- ・ 署名をお願いする時に反対の人が多く、説得して書いてもらうことが多くてつらかった。でも、この取り組みをやって良かった。また自由化に一步近づいたようでうれしかった。説明のために30分も正座していた時は足がしびれてしまい大

変だった。

- ・署名してくれた人は K 中の生徒を信頼してくれているということだと思うので、これからもその信頼をうらぎらないようにしたい。

もちろん、署名をしてくれた方々の中には、頭髪規制の見直しに対する生徒会の方針や取り組みに理解を示して、激励とともに署名に応じてくれた人も多かったのだが、同時にアンケートからは、生徒たちの苦勞もしのばれた。ともあれ、生徒会から校長宛に要望書が提出されたことを受けて、2 学期末に、教職員側の検討委員会で要望書への対応について話し合いがもたれた。

校長からは「地域の人たちからは現在の決まりを守っていない生徒への批判もある。スタートを揃えるために一旦全員が短くした方がよい。」との話があった。これに対して賛成・反対様々な意見があり、私は「一回切って揃えることを条件にすると人権の問題も含めて学習してきた方向と反することにもなり、生徒たちの不信を招きかねない。」と主張したが、話し合いはまとまらなかった。

教職員側で何回か話し合ったあと、生徒たちにもスタートの形について意見交換の場を設けようということになり、校長から考えを話してもらうことになった。3 学期のはじめに、要望書への回答として「①スタートを同じにするために違反していた生徒は短くするようにしてほしい ②生活向上の決意を行動で示してほしい」との全校生徒たちに対する要望が話された。また、同時に生徒たちの意識を把握するために再度アンケートが実施された。

アンケートには、「今まで伸ばしていた生徒には一回切ってほしい」との声も相当数あったため、実際に意見交換の場を持つということになり、生徒会検討会、臨時生徒総会を設定した。しかし、議案を検討するための検討会では「今までの取り組みで十分だから全員が切って揃えなくてもよいのではないか」という意見が大勢をしめ、その方向で提案がまとめられることになった。

臨時生徒総会でも、「今まで伸ばしていた人たちの理由を聞いた上で、しっかりとした考えを持っているのであればみんな納得できるのではないか」という意見もあり、それに対する賛成意見、生徒会検討委員会提案に対する賛成意見も多数出さ

れ、結果的には提案どおり「現状のままでスタートを校長に要望すること」が決議された。

こうして、生徒会から校長に再度要望が出され、これを校長が受け入れる形で、2 月上旬の見直し決定となっていった。そこに至るまでの道のりは、長く先の見えないカーブの連続だったが、学校からの一方的な解除通告でもなく、また、決まりが形骸化した結果の容認でもなく、「生徒会を主体としながら生徒全員をできるだけ議論や行動に参加させること」を追求した道のりでもあった。

その結果、生徒総会の場などでも安易な多数決は避けられ、賛成や反対の意見をはっきり出していくということが積み重ねられていった。そして、何より決まり見直しの問題が、自分たち自身の問題であるという意識が全員のものになったことは大事なことだった。

しかし、取り組みは終わると同時に風化が始まることもまた避けられないことだ。そこで、毎年 2 月上旬に、頭髪規制の解除が認められたことを記念する集会をもち、体育館のステージ脇に掲げられた『全校決議』の内容について、

- ・自分たちの学習や生活を高め合うことをめざして活動に前向きに取り組む
- ・問題が起こった時は話し合いで解決していく
- ・生徒会をさらに発展させていけるように努力する

などの観点で、自分たちの現状について話し合い、確認していく場を持つことにした。そして、そのことが『全校決議』を本当に自分たち自身のものにし、新しい生徒会の理想を追求することにつながるよう願ったのだった。



IWATE 教育総研ニュースはホームページにも掲載しております。

<http://www.iwakyoso.gr.jp/soken/index.html>



QRコードは
こちらから!

